

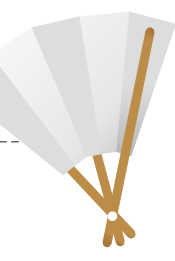
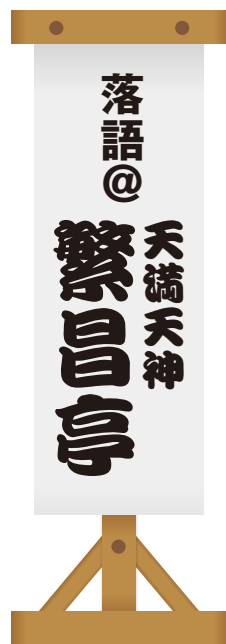
天満天神
繁昌亭



林家竹丸さん

- 豊崎中のご近所にお住まいの落語家、林家竹丸さんが、約300年の歴史を持つ落語という芸能の三つの特徴を解説。
- ① ひとりでも何役も演じ分ける
人物の入れ替わりは視線の向きを変えて表現する
 - ② オチをつける
実例を小断で。
「おい、お前、おならしたやろ」「へー」
この例えに、中学生は納得の表情
 - ③ 小道具は手ぬぐいと扇子だけ
手ぬぐいは本や財布などに、扇子は筆や煙管などに見立てて巧みに使います

① 落語解説
10月22日の鑑賞会の模様を詳しくお届けします。



(左から)竹丸さん、新幸さん、桂九ノーさん



③ 寄席噺子紹介
開幕を告げる一番太鼓、落語家が高座に登場する時の出噺子などの鉦や太鼓は若手落語家の仕事です。入門6年目の桂九ノ一(くのいち)さん、三味線の花登益子(はなとますこ)さんも加わって、寄席噺子の様々な役割が紹介されました。落語家が舞台に出るときに鳴る出噺子は、義太夫節など伝統音楽からテーマパークに流れるマーチまでバラエティ豊か。雨、雪などを表す効果音の実演もありました。

本物の迫力にドキドキ
本場の空気にワクワク
北区夢を見つける体験事業

芸術鑑賞会

令和3年度の記録

② 落語

露の新幸(しんこう)さんが、骨董屋の小僧とお客さんのちぐはぐな問答で珍騒動が起きる「金明竹(きんめいちく)」、竹丸さんが、虎の皮を着て動物園の檻に入り、虎を演じるアルバイトをする男の話「動物園」で笑わせてくれました。



露の新幸さん

④ 中学生も体験

体験コーナーのお題は「幽霊」。中学生も舞台に上がり、身振りや太鼓の音での表現にチャレンジしました。



幽霊の身振りに挑戦



三味線の花登益子さん



〈天満天神繁昌亭〉(天神橋2)
戦災で落語専門の寄席が消えた大阪に、2006年、約60年ぶりに復活した定席(じょうせき)。敷地は大阪天満宮が提供、建設費用は民間の寄付でまかなった。座席数は216。舞台にかかる「楽」の額は人間国宝の故桂米朝さんの書。午後2時開演の屋席を中心に、毎日、落語が聴ける。

締めくくりに中学生代表が出演者のみなさんに「充実した時間をありがとうございました。ありがとうございました。『動物園』はオチが面白かったです」と挨拶すると、客席から「挨拶にオチはないんかい!」の声。落語のツボを見事につかんでいたようです。



太鼓で幽霊の効果音を体験

中学生が夢の舞台に立ちました 2021ゆめキタ音楽フェスティバル

長引くコロナ禍で活動の成果を発表する機会を失った中学生に、夢の舞台をつくらう——北区はザ・シンフォニーホールで「2021ゆめキタ音楽フェスティバル」を2021年9月20日に開催しました。区内5中学校の吹奏楽部や合唱部の生徒が集まり、残響2秒の空間に豊かな音を響かせました。ホールを運営する株式会社ザ・シンフォニーホール様のご協力で実現した企画です。当初は8月に開催の予定でしたが、緊急事態宣言を受けて延期に。保護者の観覧を中止して動画の生配信に変更し、1校ずつの完全入れ替え制にするなど、できる限りの感染防止対策をしておきました。学校の音楽室とは違う大きな舞台上、音を響かせるための力が必要です。



リハーサルでは、指導する先生にも力が入りました。いよいよ本番。その場に観客はいなくても、苦しい中で一緒に練習してきた仲間と、精一杯の演奏・合唱をする生徒の皆さんの姿が輝いていました。終了後は、達成感ある笑顔が溢れていました。令和4年度も、夏頃に「2022ゆめキタ音楽フェスティバル」を開催予定です。皆さま、お楽しみに!

